



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	F・M・クリンガー論 疾風怒濤運動研究のための一つの試み
Author(s)	小栗, 浩
Citation	北海道大學文學部紀要, 2, 139-160
Issue Date	1953
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33119
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_P139-160.pdf



F・M・クリンガー論

疾風怒濤運動研究のための一つの試み

小栗 浩

F・M・クリンガー論

疾風怒濤運動研究のための一つの試み

小 栗 浩

目 次

- 一、「疾風怒濤運動」の概念について
- 二、クリンガーの生活と作品
 - イ、「疾風怒濤」
 - ロ、處女作から「双生児」まで
 - ハ、「ジムゾーネ・グリザルドー」
 - ニ、「ファウスト」
- 三、むすび—將來の問題

一、「疾風怒濤運動」の概念について

ドイツ十八世紀後半の文學史的展開については、從來一つの定式的な考へ方が支配してきた。それは、いはゆる疾風怒濤運動を前代の啓蒙思潮に對するアンチテーゼと考へ、更に兩者のジュンテーゼとして古典主義をもつてくるやり方である。しかし、このやうな考へ方に對しては、近來さまざまな角度から批判が加へられ、疾風怒濤運動の再評價がなされると同時に、更にさかのぼつて、啓蒙思潮そのもののより積極的な意義を認めようとする態度も現れてきてゐるやうに思はれる。このやうな立場を最も強く押し出してゐるのは、近頃特に評判になつてゐるジュルジ・ルカーチであらう。私は、まづルカーチの所論をとりあげ、これに對

して若干の検討を加へておきたいと思ふ。

彼は、その「ドイツ文學小史」の第一章で次のやうに言つてゐる。「今や啓蒙期と見なされるのは、せいぜいレッシングに至るまでのドイツの文學運動であり、それ以後は何か獨立した『近代的なもの』即ち悟性に對する感情の反抗と見なされてゐる。——疑ひもなくこのやうな構成は脆く、根據のないものである。ドイツの反動は、啓蒙時代と共に一七八九年の思想を葬り去り、ほぼハーマンを以てはじまる非合理主義的ロマン主義のうちに、それと釣合ふ保守的な分銅を見出さうと欲してゐるのである。」(道家、小場瀨譯、九頁)啓蒙とそれ以後の時代を對立させる構成が、なぜ脆く根據がないのであるか。ルカーチによれば、それは、啓蒙の悟性に對する反動的思想家たちの反感にその理由が求められる。彼は次のやうに答へる。「もちろん近代の反動たちの、悟性、特に『啓蒙主義』の悟性に對する反感は、完全に説明できるものである。といふのは、この評判のわるい悟性は、封建的な絶對主義と、それを正當化しようとする一切の試みにたいして容赦のない批判を行つたからである。啓蒙主義の悟性は、與へられた政治的形式を受容しないばかりでなく、反對に、まさに批判によつてそれらを破壊しようとする意志において自らを實證したのである。近代の反動たちは、どんな代價をはらつても、この批判にけちをつけようと欲し、このために、彼らの誤つた、内容空虚な構成はできあがるのである。」(同上、十頁)しかし、ルカーチのこのやうな攻撃は、彼の論敵たちにとつて全く意外であると思はれないであらう。ルカーチが、自分の敵としてはつきり名をあげてゐる「帝國主義時代のブルジョア的文學史家」はF・グンドルフ、H・A・コルフ、F・シュトリヒ等であるが、(G. Lukács: Goethe und seine Zeit, S. 17)我々は、ルカーチのこのやうな論難が、逆に何の根據もないことを、これらの人々自身の所論からとり出してゐることが出来る。コルフは、その著「精神史的に見た疾風怒濤の文學」(H. A. Korf:

Die Dichtung von Sturm und Drang im Zusammenhange der Geistesgeschichte, 1928)の中で次のやうに言つてゐる。「我々が、疾風怒濤文學の政治的諸動機から考察を始めようとする時、むろん直ちに意識にのぼせなくてはならないのは、いかに疾風怒濤がこの點では啓蒙思潮の政治的諸理念のより、ラディカルな繼續にほかならぬものであるか、といふことである……」(S. 58, 傍點筆者) 半封建的な絶對王制に對する批判は、もとより既にモンテスキュー、ルソー、ヴォルテール等によつてなされてゐた。しかし、そのやうな思想の文學における發現は、ドイツにおいてはまだほとんど現れてゐないといつてよい。わづかにこれを求めれば、レンシングの「エミリア・ガロットイ」(一七七二年) ぐらゐのものであらう。しかし、なるほどこの作品には、暴君の恣意に對する辛辣な批判がうかがはれる。が、作者は、舞台を故意にイタリヤに移し、作品の主題もまた、直接暴君の惡徳を指摘することからずらして、忠誠な臣下が惡徳に抗してひるまぬ剛氣の徳と、身分高き者のほしいまな情慾に對してあくまで身の貞潔を守らうとする婦徳を強調することによつて巧みにヴェールをかけてゐる。これを、たとへば若きシラーが「群盜」(一七八一年) において試みた、專制政治の惡逆無道や自由の彈壓に對する痛烈な反響、「ゲヌアのフィエスコの謀叛」(一七八三年) における共和主義的理念の強調、更には「たくらみと戀」(一七八四年) において、ドイツの宮廷における頹廢と因襲の支配に對するあからさまな反抗、などとくらべるならば、ここにドイツ文學における新しい時期が開けはじめたといつてもいささかの不思議もない筈である。ルカーチは、コルフ等の如きブルジョア文學史家にとつては、後のロマンティクの反動的傾向を強調し、逆に啓蒙思潮をおとめてその進歩的要素を押しつぶすためには、疾風怒濤といふ傳説をそだてあげ、「啓蒙思潮とドイツ古典主義の間にシナの万里の長城を構築するのが最上のイデオロギー的手段である」(Ibid. S. 17) と言つてゐるが、かくの如き表

現は、論争において効果的であるに似て、實は眞實から甚だ遠いものといはなければならぬ。コルフが意圖したのは、啓蒙思潮においてなほ文學的具體化を見ることができなかつた政治的革新思想が、疾風怒濤においていかに華々しい飛躍を上げたか、これをはつきりときわ立たせるためにも、疾風怒濤の一時期を劃することが、文學史にとつて、又廣く精神史にとつて大きい意味をもつといふのである。疾風怒濤を反革命的と考へたり更にそれを進歩性の名とすりかへて強調したりするならともかく、正にそれが一そう革命的名であり、階級意識的であることを強調することが、なぜ反動的であるといはれなくてはならないのであらうか。なるほど、疾風怒濤の運動が後のロマンティクの先驅をなすものであり、ロマンティクに結びついてドイツの反動政治が進歩を阻害したことはあつたかも知れない。(R・ウンガーは「ハーマンと啓蒙思潮」(Hamann und die Aufklärung, 1911) において、ハーマンの非合理的的精神をロマン精神の Vorgeschichte としてとらへてゐる。が、彼においてロマン精神が反動性とかかはりないやうに、一般にロマンティクを直ちに反動性と結びつけ、その點のみを強調するのは、あまりに政治的な、かつあまりに現代的な見方といはなくてはならない。従つて又、ルカーチにしてみれば、かかる反動の根元を洗つて、それに先立つ進歩的精神のよりよき萌芽をひき出す必要があつたのであらう。しかし、疾風怒濤の運動が、かりに後の反動とどのやうに關係してゐようと、それは直ちに疾風怒濤の運動そのものが反動であることにはならない。それどころか、コルフが特に強調してゐるやうに、ほかならぬ政治的進歩性こそがこの運動の著しい特色と考へられるのである。もちろん、疾風怒濤運動における政治的進歩性が、その出發の華々しさに比して、實は甚だ根の浅いものであり、ドイツの現實にしつかり食ひこんで行く實踐的な力をもたず、大部分の人々が政治から、文學からすらもはなれて行つてしまつたことは、それ自身一つの問題として考究されるに値しよう。しか

し、ルカーチ一派の言ひ方をかりるならば、ドイツの政治的立ちおくれが、ドイツのなじめさが、いかに疾風怒濤運動のよき萌芽を空しく枯死させたか、啓蒙思潮にはじまる健全な政治批判を一そう強烈に展開した立場が、なせもろくもくづれ去らなければならなかつたか、これらのことをはつきり見定めるためにも、この運動になほ著しく存在した進歩性をきわ立たせることが重要なのである。かく見れば、コルフ等が、疾風怒濤運動を一つの新しい時代として把握してゐることは、反動のレッテルをはられるにふさはしくないばかりでなく、かへつて進歩的の意味をもつてゐるといつてよいであらう。コルフは、啓蒙の悟性に「けちをつける」どころか、「與へられた政治的形式を受容しないばかりでなく、反對に、批判によつてそれらを破壊しようとする意志」が疾風怒濤において一そう徹底的に表明されてゐる故に、特にこの時期をきわ立たせようとしてゐるのである。そもそも、ルカーチがコルフ等の側にあると想定した万里の長城のやうなものはどこにも存在しないのである。むしろルカーチが「ブルジョア文學史家たち」に對して構築した長城こそ、いち早く撤回さるべきであらう。もとより、先の三段構への圖式を杓子定規にうけとり、總じて啓蒙思潮は單に克服された契機にすぎずとし、レッシングにまでもその積極的な意義を拒否しようとするのは、愚かしい仕業にすぎない。が、そのやうな考への取るに足りぬことは、あえてルカーチにまつまでもなく、彼のいはゆる「ブルジョア文學史家」の所説の隨所にこれを見ることができであらう。(F・メーリングによれば、近頃流行する「ブルジョアジのレッシング崇拜」(Lesing Legende, S. 7)は、フリードリヒ時代を顯揚しようとするブルジョア文學史家がでつちあげた傳説にすぎず、かかる「崇拜」が打破されたのちにはじめて眞のレッシングに對する尊敬が生れる、とする。ここでメーリングがなしたレッシング觀の變革の大きな意義はむろん高く評價されなければならぬが、既にゲルヴィーヌスに見られた近代の先驅者としてのレッシング、又

誠實な市民としてのレッシングの意義は、メーリングが言ふほど歪曲されたり覆ひかくされたりしてゐるわけではない。疾風怒濤の人々が對決した啓蒙思潮は、明らかにゴットシェットを中心とする生命なきフランス文化模倣の態度であつて、これに對する反撃がJ・E・シュレーゲル、及び少しおくれてレッシングによつてはじめられ、更にレッシングのゆるぎない議論を足がかりとして疾風怒濤の人々にうけつがれたことは、既にヘットナーその他の文學史に明らかであり、特にグンドルフが「シェイクスピアとドイツ精神」(F. Gundolf: Shakespeare und der deutsche Geist, S. 165 ff.)において明確に指摘してゐるところである。^(註)

ところで、疾風怒濤を文學史の一時期とする考へ方は、もとより單にその政治的な側面のみによつてゐるのではない。それは何よりもまづ文藝觀の變革、文藝樣式の推移にそのよつて來るところが求められなければならない。

一般に、文學が人間生活の美的形式による表現であるならば、その形式そのものにも、時代の變遷にともなつて何らかの變化が起ることはあらためて論ずるまでもないことであらう。かかる美的形式が、かりに政治經濟を基底とする上部構造であるにすぎないとしても、從つて又、美的形式の變遷そのものが下部構造の變遷を何らかの意味で反映してゐるとしても、その反映の仕方、兩者の關聯の仕方は、さう簡單に律し去られるものではない。たとへばここに、疾風怒濤運動の著しい特色とされる、演劇における三一致の徹底的破棄といふ現象をとりあげてみよう。^(註)これは、周知のやうに、フランス古典主義の拙劣な模倣としてのゴットシェット一派の演劇を打ちたほし、ドイツ固有の文學を建設するための必要な第一歩であつた。これによつて彼らは、フランス古典主義の反極としてのシェイクスピアの生と樣式を己れの肉體に内化することができた。(F・メーリングによれば、「レッシングがドイツ精神に對するフランスの支配を打破し、ドイツ文學を同族の天才シェイクスピアによつて

養つたといふ國民的「流行語」(ibid. S. 31)は取るに足りぬとし、レシニングにおいて重要なのは、彼がまず第一に英國のリチャードスンらの市民文學を範としたことである(S. 32)といつてゐるが、發生的にはともあれ、レシニングにとつて、又ドイツ文學にとつて本質的なのは、あくまで彼がシェイクスピアの意義をはつきりと示したことにある。又、シェイクスピアがよりドイツ人にふさはしいと彼が考へたのは、その市民性によるのではない。有名な文學書簡第十七に言つてゐるやうに“das Grosse, das Schreckliche, das Melancholische, besser auf uns wirkt, als das Artige, das Zärtliche, das Verliebte” (Lachmann: 8. Bd. S. 42)と彼は考へたのである。従つて先の“das landläufige ‘nationale’ Schlagwort”は依然として意味をもつてゐる。彼らのシェイクスピア攝取が、レシニングの卓抜な見解を先蹤とすることは申すまでもないが、しかしレシニングがシェイクスピアにおいて見たものは、アリストートルスの法則の最高の具體化といふことにほかならなかつた。しかるに、疾風怒濤の人々は、アリストートルスの法則から完全に自由である點にシェイクスピアの偉大さを見出した。もつとも、この場合にも、社會經濟面との關聯が考へられないわけではない。即ち、フランス古典主義からのドイツ文學の解放、獨立化は、プロイセンのフリードリヒ大王を先頭としてドイツ國そのものが興隆に向はうとする氣運、いはゆるドイツ運動(Deutsche Bewegung)の端的な現れと見る事ができるからである。

(も)とも、メーリングによれば、フリードリヒを以て「國民的再生の英雄」とすることはトライチュケなどに代表される傳説にすぎぬ、といはれる。(ibid. S. XXXI)が、フリードリヒの個人的動機や政策が個々の點で、どうであらうとも、その存在全體のもつ歴史的意義は否定できないであらう。がしかし、かかる興隆の氣運が、一はフリードリヒによるフランス文化の一そう積極的な攝取に、一はレシニングによる理論的なシェイクスピア論に、更に一は疾風怒濤の非合理的な自然としてのシェ

イクスピア觀に現れる時、一つの氣運のかかる多様な現れは何によつて説明されるか。私は、共通の原因をそれぞれ別個に受容しかつこれに反應して行く各人の素質や趣味性にそれを求めるほかないと考へる。^(五)さうして、これらの特殊な趣味によつて實現された様式が一つの風潮としての力をもつて來るとき、その時代を支配する獨自な藝術様式が生れてくるであらう。かく見れば、藝術が社會經濟的下部構造を何らかの意味で反映することは認めても、なほそのほかに、各藝術家の個性的な資質が生み出して行く様式の變遷、従つて又藝術そのものの中で行はれる様式の推移が、それ自体一つの研究領域として問題となりうるわけである。もつとも、たとへばルカーチのやうに、文學史を政治史や社會史の一側面としてのみ考へ、それに進歩と反動の尺度をあててすべてを裁斷し去る立場からすれば、社會經濟的下部構造を一應にもせよ捨象した様式の變遷といふやうな問題は、本來なんの意味も價值もないものであらう。多くの政治家にとつて文化や藝術がそれ自體として問題とはならないやうに、文學を政治の應用面としか考へぬやうな「文學觀」が存在しても別に不思議はないが、文學とその發展過程を人間精神發展の一つの獨自な領域と認めるならば、様式の變遷といふ甚だ非政治的な問題も、少くとも文學研究の一つの大きな問題分野であることを失はぬであらう。これを當面の我々の問題にひきつけて考へるならば、レシニングと疾風怒濤が、同じく硬化せる啓蒙の藝術觀を克服しようと試みながら、一は一そう高度な主知的立場に達し、一は總じて理知を否定する非合理的立場に向はうとしてゐることは、たとへばグンドルフの卓越した分析によつて明らかに示されてゐるところであり、疾風怒濤がいかにレシニングその人を強力な支へとしてゐたにもせよ、藝術様式の變遷といふ觀點からこれを見るならば、レシニングと疾風怒濤が本質的に異なる立場にあることは、異論をさしはさむ余地のないことと考へられる。

ところで、私がこの小論で企圖するのは、メーリングやルカーチに反

對してコルフ等の立場に組しようといふのではない。ルカーチらが時として論争に急なあまり偏向をまねがれぬことはあるにもせよ、レッシングに代表される啓蒙思潮のよりよき進歩的な要素を積極的に認めようとする態度は、それ自體正當でもあり意義あることとしなければならぬ。が又私は、疾風怒濤運動に見られる政治的進歩性を特にとりあげて問題にしようといふのでもない。ルカーチの反駁にもかかわらず、疾風怒濤が前代にまさつて著しく政治的となり、革命的性格を帯びてゐることは既に周知のことに屬する。私は、疾風怒濤運動をやはり一つの固有な文學史の時代としつつ、その中で活躍した一人の代表的な詩人、フリードリヒ・マクシミリアーン・クリンガー(Friedrich Maximilian Klinger)をとりあげ、彼がいかにこの新しい理念を己れの文學活動に具體化したか、又時として具體化しそこねてゐるか、さうして、彼らが叛旗をひるがへした筈の當の敵である啓蒙思潮の立場に他ならぬ彼自身が陥つてゐるか、更に、クリンガーに見られるこのやうな事情が疾風怒濤運動全體にとつてどんな意味を有するか、これらの點について少しく見解をのべてみたいと思ふのである。

二、クリンガーの生活と作品

一八二六年、老年のゲーテは、遠いロシアのペテルスブルグに住むかつての文學の盟友、今は陸軍中將として引退後悠々自適の生活を送つてゐるマクシミリアーン・フォン・クリンガーに、故郷フランクフルト・アム・マインの父の家の描かれてゐる繪を送り、それに次の詩を書きそへた。

An diesen Brunnen hast auch du gespielt,
Im engen Raun die Weite vorgefñlt :
Den Wanderstab aus frommer Mutter Hand
Nahmst du getrost ins fernste Lebensland

Und magst nun gern verloschtes Bild erneun,
Am hohen Ziel des ersten Schrittes dich freun.

同じ泉のほとりに遊んだといふのは、むろん詩の上のことであつて、彼らが幼友達ではなかつたばかりでなく、その生ひ育つた環境において全く相反するものであつたことは既に周知のことである。詩人としての資質においても、人間的風格においても、かなりへだたつてゐた上に、互ひの友情に氣まづい軋轢もあつたことからして、以後終生相會ふ機會をもたなかつたのであるが、彼らはさういふいざこざにわずらはされることなく生涯互ひの人格を尊重し、人間的價値を認めあつた點では、疾風怒濤運動に活躍した他の同年の詩人たちとくらべものにならないものがあるやうに思はれる。一八三一年、クリンガーが死んだといふしらせをきいた時も、ゲーテは「非常に悲しみ、」ミューラー翰林に向つて「Das war ein treuer, fester, derber Kerl, wie keiner」(31, 1831)と言つたといはれる。これは、若き日の友を失つて悲しみに打たれた老人の感傷的な回顧とのみ考へるべきではなく、既にゲーテは「詩と眞實」の中でも、クリンガーがしつかりした立派な人物であり、將來性をも大いに期待させるやうな男で、彼を知るやたちまち親しい友人になつたとつたへてゐる。(註14)

クリンガーの文學史における位置は、たまたま彼の戯曲の題名がその時代の文學運動を表示することになつたため、その眞價以上に重んぜられ、有名になつてしまつた感があるが、一面から見れば、クリンガー自身にとつても、その本領が「Sturm und Drang」の如き作品にあるわけではなく、彼は彼なりに疾風怒濤運動をのりこえて獨自の發展を上げてゐるのであるから、右のやうな事態になつたのは、實は彼自身にとつても迷惑なことであるにちがひない。しかもこの作品は、我が國では有名になりつばなしにされたまま、未だこれについての立入つた検討がな

んななされてゐない状態にあるのは遺憾なことといはなければならぬ。

では一體、ゲーテによつてそれほど評價されたクリンガーとはどういふ人間であつたか。彼の文學的發展はいかなるものであつたか、もし又、彼の「疾風怒濤」が代表的作品でないとするならば、彼の本領はどこにあるのか。従つて又彼の文學史的位置はどこに求めらるべきであるか。

一七九八年、既に疾風怒濤の熱狂も遠くすぎ去つた頃、クリンガーは「Geschichte eines Deutschen der neuesten Zeit」といふ小説を發表したが、その中で、主人公エルンストは、師からルソーの「エミール」一巻を贈られ、次のやうにとされてゐる。「Der Jüngling, der keinen Führer hat, wähle diesen. Er wird ihn sicher durch das Labyrinth des Lebens leiten, ihn mit Stärke ausrüsten, den Kampf mit dem Schicksal und den Menschen zu bestehen。」エルンストの導き手として選ばれたルソーは、實は作者クリンガーにとつて生涯の唯一人の師であり、「エミール」は彼の聖書であつた。ゲーテはこの作品を讀んだ時、クリンガーが毅然としてかつての理想を胸にいだき、一步もゆづるところのないのに大いに感動し、「詩と眞實」の叙述にまでその氣分が影響してゐるといはれる。(E. Schmidt: Lenz und Klinger, S. 110)

フランクフルトの貧しい警官の子として生をうけ、八才にして早くも父を失つたクリンガーは、洗濯女や小賣商人に身をやつした若い母の手で育てられなければならなかつた。幼くして人生の苦汁をなめ、世の中の暗い面のみを見、人生の矛盾に悩みながら、彼の心はしかしし環境の重壓にいささかも屈することなく、逆にそれを糧として強き人間として成長して行つた。このやうな資質を有し、このやうな環境にもまれて行つたクリンガーが、社會惡に眞向から反對し、古き因襲を打破して、自由にして自然な生活を唱導したルソーを生涯の師としたのはまことに當然なことであつた。

啓蒙の硬化した理知万能に對して、斷乎として叛旗をひるがへした疾風怒濤の若者たちにとつて、感情の權利を主張したルソーが一つの大きな精神的支柱であつたことは周知のことである。しかし、ルソーの導入した新しき理念は、必ずしも彼が本來意圖した健康な自然の回復といふ結果をもたらしたしはしなかつた。ロココ趣味の宮廷的洗煉は、都會の生活に倦怠したあけく田園の生活に新しい刺激を求める。が、ここに見出された自然は、實は自然とは名ばかりの、農耕にともなふ苦患にみちた汗を知らない變態的な都雅にほかならなかつた。彼らの自然によせる讃仰は、現實はなれのした涙もろい Empfindsamkeit の風潮を生み出してゐる。このことは、ロココ趣味にわざわひされた人々において見られるばかりでなく、かかる懦弱な風潮に反抗して立ちあがつた筈の疾風怒濤の詩人たちにも屢々見られる現象である。たとへばラインホルト・レンツは「Waldbruder」(1791) Ein Pendant zu Werthers Leiden といふ副題を附しながら、そこに登場する主人公ヘルツは、ヴェールテルとは似もつかぬ薄弱な、自己を喪失した感傷的な男であるにすぎない。ヴェールテル自身にしても、作者ゲーテの强健な魂が主人公をして單なる感傷家から titanisch な男子にまで變貌させてはゐるが、彼の中にかかる感傷的な風潮の影響を指摘することは容易であらう。更にレンツの最も有名な作品「Hofmeister」(1774年)においても、主人公ロイファアの性格は強い實行力をもたない泣き虫であるにすぎず、彼が時として行ふ突飛な振舞はさういふ感傷癖のヒステリカルな現れにすぎない。總じてレンツは、ゲーテの兄弟であると自ら信じ、クリンガーと並び稱される詩人であるにかかわらず、その本質には、新しき理念の擔ひ手としての力感はいくらも見られないと言つてよい。疾風怒濤の詩人に往々見られるかかる感傷的傾向は、クリンガーにおいて本來縁のないものであつた。彼の生涯をつらぬくものは、あくまでも自己を見失ふことのない不屈な意志であり、それを實現しようとする逞ましい Kraftgefühl

であつた。この點において、クリンガーこそ疾風怒濤の若者たちの中でルソーの精神をつぐ最良の弟子であつた。では彼のこのやうな精神はその藝術活動においてのやうに實現されてゐるか、その諸相について考察を進めてみよう。

イ、「疾風怒濤」

クリンガーの代表作が普通「疾風怒濤」であるとされてゐることは誰しも異論のないところであらう。ところで、この作品が甚だ有名であるに反して、作品の價值については從來極めて否定的であり、ほとんど一顧の値すらないとされてゐるやうである。古くはコーベルシュタインやゲルヴィーヌスからシェラーをへてブランドス等にいたるまで、ほとんど罵倒に近いやうな批評が與へられてゐるが、代表的な例としてはヘットナーの言葉が特徴的であらう。彼は「疾風怒濤」の全般的な性格を論じた後、この作品は「Ein wüstes Durcheinander von Geist und Unsinn!」(H. Hettner: Geschichte der deutschen Literatur im 18. Jahrhundert, 3. Buch, S. 210)と斷じてゐる。當代の批評家の中でも、特にレンシングの如きは、知人にあてた手紙の中で、クリンガーとレンツとを比較し、レンツはそれでもまだ認められはするが、クリンガーの「疾風怒濤」の如きは「到底最後まで讀むにたへない代物である」(An Karl Lessing, 8. Jan. 1777. K. Lachmann, Samtl. W. 18. Bd. S. 221)と言つてゐる。(概して、この時代のすぐれた人々が疾風怒濤の若者たちにいだいた反感は著しい。特に興味あるのは G. Chr. Lichtenberg である。彼は有名な Aphorismen の中で「この六十八年以來、ドイツ人ほど Genie といふ言葉を口にした國民はゐない。しかもこれほど Genie の乏しかつたこともなく」(A. Leitzmann, III. Heft: 1775/1779, S. 124)と言つてゐる。)ほとんどすべての文學史家を支配するこのやうな評價は、なるほどそれ自身としては正しいであらう。しか

し、それだけでもつてある作品の文學史的評價が十分になされるのではない。ある作品が一つの時代精神をどのやうに表現してゐるか、さうしてその作品がその時代に對してどのやうな影響を與へたか、これが文學の史的考察にとつて何よりも重要なことであらう。實際、當時の青年たちは、この混沌として暗い世界の中で、なほ本能的な自由と光明への意慾に押し出されながら、若者たちが模索し闘ひ突き進んで行く姿に、自分たちの未熟ではあるが同じく光明を求めてもがき苦しむ姿の如實な表現を見出したのであつた。一七七七年、この作品がザイラーの一座によつてフランクフルト・アム・マインで上演された時、ある演劇紙は次のやうに書いた。「疾風怒濤が何であるかを自ら感じ、あるひはほのかに豫感する人のために、この戯曲は書かれた。だが、神經の弛緩せる無氣力な連中、疾風怒濤の言葉をきいてシナ語かインド語でもきいたやうな氣になつて果敢なところを知らぬやうな連中は、この作品から何物も得られないであらう」(H. Hettner, *ibid.* S. 211)やうして、クリンガーの「疾風怒濤」に最もはげしく震撼され、その意義を最も深く體得したのは、ほかならぬ若きシラーであつた。一八〇三年、シラーは、ペテルスブルグに住むヴォルツォーゲンにあてて次のやうに書いてゐる。「クリンガー將軍に、私が彼をどんなに高く評價してゐるかをたへてくれたまへ。彼は、二十五年前にはじめて、そして強烈に私の精神に働きかけた人々の一人だ。青年時代に與へられたこの感銘は私の心からかつて消えたことがない。」クリンガーの悪評高いこの作品の當代に與へた影響が右の如くであるとすれば、これを後代の超越的な批評によつて片づけ去ることは、文學史の立場から言つて正當な態度とはいへない。のみならず、作品を仔細に検討するならば、ここには單に狂氣や錯亂があるばかりではない。ブランドスが言ひ切つたやうな「welberhinter Unsinn!」(G. Brandes, Goethe, S. 110)のみが、この作品の Sinn なのではない。手法の未熟に由來する混亂、不整合はなほ著しく見られるに

しても、疾風怒濤の青年たちが標榜した *Kraftgenie* は、ともかくも相當の迫力と説得力をもつてこの作品に具體化されてゐることを否定できないのである。

むしろ、「疾風怒濤」の再評價の試みは、本國ドイツにおいても見られないわけではない。私がふれえた限りでは、ヴェルナー・クルツの「疾風怒濤論」が最も充實したものであると思はれる。彼は言ふ。「私は、從來この作品に對してなされてゐる評價に對して反對せざるを得ない。クリンガーの戯曲は *Unsin* でもなく *platos* でもない。これは一つの告白文學であり世界觀の文學なのである。詩人はこの作品において——彼の他のどんな戯曲においてよりも——その完全に——あの時代の文學の發展から理解される一つの形而上的な見解を我々に與へてゐる。」(ibid. S. 2) この世界觀は感情といふ一語につくされる。詩人の内心から吐露される確信は「完全なる *Gefühls* mensch のみが眞實の人間であり、かかる感情人は同時に高貴なる *Kraft* mensch である」(ibid. S. 2) といふことである。この認識によつてはじめてこの戯曲は、文學史の中に正當な位置を與へられるし、「疾風怒濤運動はこの戯曲によつてはじめて積極的な表現を得たのである。」(ibid. S. 3) クルツが、この作品の積極的な意義を論じた勞は、我々もまたこれを多としなくてはならない。が彼は又、その立論の動機から言つてやむを得ないであらうが、作品の積極性を論ずるに急なあまり、その否定的な面について、從つてこの作品が早く忘れられねばならなかつた點について、十分であつたとはいへない。我々はあらためて、この作品の本質、そこから發して作者が更に進むべき傾向等について考察を加へなくてはならない。

この作品は、ワイルド、ブレイジマス、ラ・フュ等の若者がアメリカに上陸するところからはじまつてゐる。彼らはそこで、バークリ卿の一家に出會ふ。この一家はかつて英國の貴族であつたが、バシー卿の策謀によつて國外に追放され、バークリ卿は今さびしく娘のカロラインと共に

に故國をしのびつつ流竄の生活を送つてゐる。一方、バシー一家も、その後失脚し、一家離散の悲惨な運命に見舞はれてゐた。ところが、今上陸したワイルドは、實はかつてバークリを追放したバシーの息子カールが變名してゐたのであつた。ワイルドはそこで、かつて自分の許嫁であつたカロラインに合ひ、再びはげしい戀におち入る。丁度この時、同じ場所に船長ボイエトが現れる。彼は實はバークリの息子で、かつて自分の一家がバシーによつて悲運につき落されたのをうらみ、たまたま自分の船に乗りこんだバシー卿を海中に投じて仇を取つたのであつた。ところが丁度この時、かつてバシー卿の恩顧をうけた黑人によつて、バシー卿は實は殺されたのではなく、ひそかに命を助けられ、同じくアメリカに上陸してゐたことがわかる。やがてそのバシー卿が彼らの前に現れ、意外なことを告白する。「あなたの家をほろぼし、あなたを追放したのは私ではない。それをやつた男はとうに死の谷にとざされてゐる。その男の靈はやすらかに眠るがよい。その男の名とその行爲の動機はもう思ひ出さうとは思はぬ。」(V・2) バシー卿の寛大な態度によつて、兩家は圓滿に仲直りし、カールとカロラインは幸福な生活に入る。

右の筋において我々にまづ異様の感をいだかせるのは、ばらばらに離散した二つの家族が、すべて、本國を遠くはなれた大陸アメリカで、時を同じくして相會ふといふ、ほとんど想像を絶した偶然である。どうやら、作者はアメリカといふ大陸を、イギリス近邊の小島でも心得てゐるらしい。まづワイルド(カール・バシー)が、アメリカに上陸して直ちにバークリ一家に出會ふといふことが、驚くべき偶然である。次に流浪するバシー卿が、自分を仇とねらふ船長ボイエトの船にのりこむといふのが不思議である。ここでは、作者は大西洋といふ大きな海をどこかの湖とでも考へてゐるのではあるまいか、と讀者は疑ひたくなる。又、ボイエトによつて海中につき落されて死んだ筈のバシー卿が生きてゐたこと、更に、アメリカのどこかに流れついたらしいバシー卿の住居が偶

然さがし出されること、最後に、このバシー卿が、あたかもデウス・エクス・マキナのやうに一同の前に現れて万事を解決すること、これらの甚だしい偶然のおびただしい積み重ねは、讀者をして、作品の世界の現實性に對する共感を冷却させるのに十分な効果をもつであらう。さうして、我々の驚きと失望を最高頂に達せしめるのは、バシー卿が、これまでの不和軋轢はすべて誤解にもとづくのだ、と告白することである。何の意味も、何の必然性もない誤解が、この作品の恐ろしい葛藤を支へてゐたとすれば、この作品はとどのつまり嘘だつたといふほかはなくなる。讀者は下手な作り話をきかされたあげく、最後にだまされたことに氣づかされるわけである。バシー卿が最後に、この誤解の原因となつた者の名を問ふまいといつたその男は、他ならぬ作者クリンガー自身であつたらう。みすばらしい自分の手品の種明しを、作者はさすがに自分でやつて見せるわけには行かなかつたのであらう。

しかもこの作品の不自然さはそのみにとどまらない。船長ボイエトは、海上で三度ワイルドに出會ひながら、互ひに、かつて自分たちが親しい間柄であつた友であることに氣がつかない。のみならずボイエトは、ワイルドに對して「永遠の憎惡」といふ不可解な感情をいだいてゐる。('Ich hab' vom ersten Blick einen solchen Hass auf dich & Wild' geworfen, dass meine Faust nach Degen und Pistol greift, wenn ich dich von weiten erblick' Ⅲ. 4更Ⅲ. 4, Ⅲ. 5) 一方、ワイルドがカロラインを愛してゐたのは、前者が十五才、後者が十三才の時であつた。さうして、その後十年の歲月が流れてをり、二人が再びアメリカで出會つてもすぐには顔の見わけもつかなくなつてゐるにかかはらず、カロラインがかつての自分の許嫁であることがわかつたとたんに、二人の間には昔の戀が一舉にもえ上るのである。ボイエトの憎惡といひ、ワイルドの情熱といひ、いづれも全く人間の自然を無視した亂暴極まる筋立といふほかはない。なるほど、當代詩人たちの理想としたの

は *Kraftigheit* といふことであつた。しかしクリンガーは、この作品において、全體の構成に必然性を與へる天才なく、人物に内からわき上る生命をふきこむ力もなく、その缺如を、いたづらに叫喚と感嘆詞を連發させることによつて覆ひかくさうとしてゐる。ブランドスが「ノンセンス」と評せざるを得なかつたのもあながち不當とは言へない。一體に、疾風怒濤の自然主義は、やたらに人間の情熱をもえ上らせ、異常な行爲をすればそこに新しい生命が躍動し、眞の自然があると考へてゐたむきがあるが、人間心理の自然な動きを無視した非現實的な情熱の燃焼などといふこしらへもので、彼らが標榜した「人間の解放」などが行はれるものではなく、衰へたりとはいへ、啓蒙の理知の支配權をさう簡単にゆるがせうるものではなかつた。

「疾風怒濤」のいたるところに見られるおびただしい偶然の錯綜に對して、先にあげたクルツは、「これは偶然とは見えるが、しかし詩人の心からすれば偶然ではない。万物の絆たる愛が、作中人物に知られずして彼を導いて行くのであり、」(ibid. S. 66) この偶然の出會ひにおいて、「詩人の見解によれば——より高き導きといふ形而上的契機があらはとなるのである。」(ibid. S. 17) カールが久しい苦難の後にカロラインに出會つたのは「より高き力の導きと庇護によるもので……すべては、この力によつて解決への準備をされたのである。」(ibid. S. 28) しかし、筋の發展を必然性によつて動機づけることができな場合に、すべてこれを偶然事によつてつなぎあはせ、その原因を「愛」とか「神」とかいふやうな形而上的なものにとづかせ、それで事がすむのであれば、他ならぬ「愛の神」は、何よりもまづ作者の無能力を庇護する神であるにすぎず、作者が神の愛をほしいままにしたおかげで、作中の人物は支離滅裂のままに放置されてしまつた、といふほかはないであらう。更に又、登場人物は單に熱望し絶叫しさへすれば、「愛の神」の導きによりどんな不可能事をも克服して求める目的に達しうるといふのでは、彼ら

の強調する感情の權利も、實は他力本願な虫のよさと何ら取るところがないであらう。加ふるに、かりにクルツが言ふやうに、作者はこの作品で愛の形而上學を具現しようとしたとしても、その核心をなすカロラインとカールの戀に、かかる形而上學を推測さすべき深い意味づけが與へられてゐない。カールはただ愛する女を失つた故に悩むのである。さうして、愛する女が再び得られたために世界が調和として感ぜられるのである。カールの愛はひたすらカロラインのみにかはつて、自らの個人的な關心を越え出る普遍的な愛にまで深化され肉づけされてゐない。我がこの作品を世界觀の作品と呼ぶに躊躇せざるを得ない所以である。

しかもなほこの作品を「世界觀の文學」と呼ぼうとするならば、我々は疾風怒濤の世界觀が、いかに底の淺い一人よがりのものにすぎなかつたかを主張せざるを得ないのである。さうしてこのやうな致命的な缺陷が、多くの文學史家によつて非難されるところとなり、この作品に文學史の一エピソードとしての意味しか認めさせなかつた原因であつた。

ではこの作品が、右のやうな重大な缺陷を有するにもかかはらず、當代の青年たちに大きな感銘を與へたのは何に由來するか。それは、主人公ワイルド（カール・バシー）と、その一そう純化された姿である父バシー卿の性格に見られる典型的な疾風怒濤人的性格であると考へられる。まづワイルドについて考へてみよう。彼は、國王の寵を得た幸福な家庭の子として少年時代を過した。彼は容貌にもすぐれ又體力にもめづまれた逞しい男子であつたが、心もまた強く正しく、すべての人が彼の入柄の立派なことを認めてゐた。（Ⅰ・2・3、Ⅱ・4）彼のこの恵まれた境涯を完成するものはカロラインとの愛であつた。愛によつて、彼は人生並びに宇宙の調和に目ざめて行く。愛こそは万物を支へるものであり、神は愛として自覺されてくる。（Ⅲ・7）しかるに、彼をこの幸福な調和の世界から絶望につき落とす事件が起る。バークリとの敵對關係がこれであり、やがてこの一家の離散によつて、カールは戀人を失ふ

に至る。愛の反極としての憎惡が、カールをして内面の調和を見失はしめた。彼のその後の放浪生活は、失はれた心の平和を回復しようといふ願ひによつて導かれる。アルプスの孤獨な山中に、又戰爭と勞働の世界に、心の充足を求めてはみるが、（Ⅰ・1）空しさは依然として彼の心を占めてゐる。このやうな苦惱をいだき、數多くの艱難をへて、カールは遂にカロラインとの再會において、失つた幸福と心の調和を再び獲得する。ここにかがはれるカールの性格は、絶望の中にあつてあくまで愛の理想を見失はぬ誠實な魂と、苦患にたへてこれを持ちきつて行く逞しい生命力である。

ワイルドが疾風怒濤人の若々しい感情と力の天才の理想を示してゐるとすれば、作者がバシー卿において描かうとしたのは、老年のより成熟した疾風怒濤人のタイプである。バシー卿の性格は、何よりもまづその *sympathisch* な、又 *sympathetisch* な點に見出される。彼はバークリ一家と親密な間柄にあり、息子カールがカロラインと結ばれることにおいて一そう充實した幸福な生活を送つてゐる。が、兩者の反目、それにとまふ一家の離散といふ悲運が、彼を絶望の状態におとし入れる。しかし彼の愛情にとむ性格は、悲境にあつてもそこなはれることなく、たまたま自分を敵とするボイエトの船に乗り合はせた時、船長の奴隸として仕へてゐる黒人に對しても、人種的差別を無視してこれをやさしく遇してゐる。のみならず、バークリ一家との反目が、第三者の策謀によつてゐたことを知るや、彼は一切のいざこざを忘れて、再び昔の親密な間柄を回復しようと願ふ。「愛が人間をよく導く」（Ⅴ・2）ことを彼は信じ、それ故に自分もまた黒人によつて命を救はれ、やがて兩家の間に立つて、双方の親睦を舊に復させる役割を果す。もとより、バシー卿も本來やさしい心根の人だけであつたのではない。長年の政治生活において彼をよく支へてきたものは、息子カールにも劣らぬ逞しい實行力であつただろう。しかし、年をへ、經驗を重ねるにつれて、彼のうちにひそん

てゐた共感的な人間愛が支配的となり、實際的な行動力はこの人間愛を強く押し進める力にまで成熟して行つたのである。彼における「感情」は、特定の個人に對する愛情に燃え上ることではなくして、おしなべて人間に對する寛厚な好意に場所をゆづり、いはば愛の行者としての風格をそなへてくる。感情人としてのバシー卿は、カールに見られるやうな情熱としてではなく、愛情によつて人にも我にも安らぎを與へようといふ、靜かなしかし強い願望において現れる。

更に、副次的な人物として、いたづらな憎惡の激情にのみとらはれて博大な愛の心を知らない船長ボイエトや、感傷的な愛情にのみおぼれて實行力を有せぬブレイジウスなどが、いづれも *Gefühlsmensch* として把捉されながら、一は冷く、一はイローニシュに描き出されてゐることも、先の二人の人物に示されたクリンガーの心の基調を裏書きするであらう。力は單に暴力であつてはならない。愛情もまたいたづらに感傷におぼれて懦弱に流れてはならない。力が愛を支へ、愛もまた廣く人間への愛に擴大され醇化される時、はじめて疾風怒濤の *Kraft- und Gefühlsgenie* は完成されるであらう。作品 *“Sturm und Drang”* に描かれたかかる *Kraft- und Gefühlsmensch* の諸相は、もとより澄明な形で示されてゐるのではない。むしろ、混濁した暗い世界の中でもがき苦しむ人間たちが、いはば醗酵状態そのまゝの姿で我々の前に投げ出されてゐる。が同時に、この清濁未分の醗酵そのものが、當時の若い人々にとつて大きな魅力であり價値だつたのである。

さて觀點をかつて、この作品を、詩人自身の魂の成熟、その詩作活動の發展といふ點から見れば、我々は既にこの作品において、彼の全發展の縮圖を、將來への方向を、はつきり讀みとることができると考へる。情熱の奔騰から高朗な人生遠觀の境地へ、個人的な情熱の世界から廣い人間愛の立場へ、内心の暗い衝動や愛憎に身をさいなまれるワイルドから、博大な愛をたたへた悟りの人バシー卿へ、この發展進化の道行

は、やがて作者クリンガーが目ざしてゐた理想への過程にほかならなかつた。我々は更に論を進めて、クリンガーの生涯とその詩業においてこの問題がどのやうに展開されてゐるか、を論じなくてはならない。

ロ、處女作から「双生児」まで

クリンガーは、一七七五年、悲劇「オトー」(*Otto*)をもつてその文學的生涯をはじめた。ゲーテの「ゲッツ」より二年おくれ、「ヴェーデル」とレンツの「家庭教師」より一年後のことである。しかし、この作品は、シェイクスピアの「リヤ王」、「オセロ」、「ハムレット」、「マクベス」、更にゲーテの「ゲッツ」の模倣が著しく、作者自身もこれを自分の創作とするのに躊躇したのであらう、後年彼が選集を出版するに際してこの作品を自ら破棄してゐる。作者自身にとつても小手だめしの習作程度にすぎないこの作品に、我々もまた當面の問題との關聯において一瞥を與へるにとどめておこう。筋は、フリードリヒ公に仕へるゲッツ風の剛直な騎士オトーが、情熱にかられ敵アーデルベルト方の衝中に陥り、主家を不幸におとし入れたあげく自らの命をたつまでを扱つてゐる。オトーその他の人物に見られる怒り、悲しみ、絶望等の表現は、正しく疾風怒濤のスタイルにふさはしいものであるが、しかし作者は、主人公オトーを十分に肯定的に描いてはゐない。オトーは内からあふれる力をもてあまし、それに正しい方向を與へることを知らない。彼の破滅は、自らの情熱を規制することのできない粗野な無知に原因する。作者の同情も、オトーによりはむしろ冷靜な公子カールに注がれ、欲するならば我々はカールの方に、後のワイルドの初發的な姿を見ることができであらう。

第二作「惱める女」(*Das leidende Weib*)は「オトー」に次いで同じ年に現れたが、これは「疾風怒濤」にくらべてもはるかに結構のととのつた作品と考へられる。

斯は、文藝を愛好する公使夫人が、フォン・ブラジトといふ男と道なぬ戀におち入り、遂に兩人とも身をほろぼすに至るまでを扱つてゐる。戀愛の情熱と社會的制約との衝突、これは、ルソーの「新エロイーシ」にはじまる當代流行のテーマであつて、人々はこの矛盾相剋において、新しき感情の意義と價值に目ざめ、硬化せる因襲に反抗したのであつた。しかるに、我々がこの「惱める女」に見出すのは、新しき感情の權利の主張ではなく、情熱に身をゆだねるのは破滅のものであるといふ御説教を一步も出るものではない。この作品がレンツの「家庭教師」の影響のもとに作られたことは既に知られてゐるが、レンツの作品自體が、家庭教師などといふものが良家の子女にとつていかに危険なものであるかといふ警告にほかならず、この意味で、レンツは實は全く啓蒙思潮の教訓劇の立場にあり、一般に彼の疾風怒濤よりはほとんどくけおどかしにすぎず、彼の感情も思想もまことに古めかしいものであつた。「惱める女」において強調されるものも、あくまで道德的な秩序の維持であつて、軟弱な文學青年輩がいかに良風美俗を害するかが強調されるのである。もつとも、文化にわざわひされた軟弱な精神に對する攻撃は、ルソーにはじまる文化悲觀論の主要テーマであつて、その限りではクリンガーもむろん同じ戦線に加はるものであつた。しかしながら、新時代の意義が、生命の通はなくなつた理知に代るべき強烈な感情の主張にあつたとすれば、かかる感情を代表的に實現すべき戀愛の情熱が、この作品において懦弱なる青年によつてはなはれ、否定的なシチュエーションにおいて惡としてしか見られてゐないことは、既にこの作品から疾風怒濤の性格を奪ふものでなくてはならぬ。戀愛の情熱といふこの時代の典型的なテーマをとりあげ、クリンガーは正しくここにこそ疾風怒濤の精神を發露すべき筈であつたが、逆に彼は丁度この點で疾風怒濤ではなかつたことを證明してゐる。情熱は惡である。傳統の良風美俗はあくまでも守られなくてはならない。それは、最後の場面で、公使が愛する妻を

失つて絶望に沈みながらも、あとに残された子供たちのために生きる決心をする點にはつきり現れてゐる。そこには全く新しい道德の主張は見られない。頽廢した氣風を古き良き家庭の枠によつて正さうとする試みがあるにすぎない。試みにこの作品に流れる感情の強度を、疾風怒濤の代表的な作品のそれとくらべるならば、全く思ひ半ばにすぎることがあらう。「群盜」のカール・モールや、ゲヌアのフイエスコの激情は、同じく道德性の枠によつて挫折せしめられはしたが、それに激突し、それを打破せずんばやまぬていゝ沸きあがり押し寄せまる力感が彼らの本質であつた。道德性の枠がそれらの作品の核心ではなくして、それは、情熱がそこにおいていよいよ激しく燃え上るべき單なる契機にすぎなかつた。そこに新しき時代を劃さうとした青年たちの苦惱や焦燥があつたのであらう。これに反して、惱める女はひたすらに道德的である。彼女は情熱にひかれることによつていよいよ道德の不可侵な所以を意識させられる。貞淑にして小心な彼女は、情熱にまきこまれることによつてますます己れの罪惡感を深めて行く。かくして、作品の基調は情熱の強調にあるのではない。かへつて、情熱は、崇高な道德心がそこにおいていよいよその崇高性を高むべき契機であるにすぎない。さうして、そのやうな道德的な苦惱が讀者に感動を與へるのである。もつとも、この作品に登場するフランツといふ青年は、打算的な悟性に反抗する Genie の性格をもつてゐる。しかし、彼がその理想を實現するのは、實は社會からの逃避といふ消極的な形でしか行はれてゐない。のみならず、フランツの性格には、この作品の全體的な感銘を支配するほどの力もなく強調もされてゐない。要するに、この作品においては、作者はまだ十分に Kraftsanie の理念を展開しうるほど熟してはをらず、かへつて、彼がなほ著しく啓蒙の藝術觀、道德觀の影響をうけてゐることを示してゐる。

クリンガーの文名を最も高からしめ、後世までも價值ありとされるの

は、第三作「双生児」(“Zwillinge” 1776)であらう。この作品が、一七七五年、ハンブルクのシュレーダーによつて出された懸賞募集において、アントン・ライゼヴィツの「ユーリウス・フォン・タレント」と競ひ首位を得たのは周知のことである。應募作品の性質上、クリンガーは當時の舞台のしきたりを考慮し、筋の統一、性格の對照等に周到の用意を見せ、レシグ風の戯曲作法をかなり効果的に驅使してゐるといつてよい。題材は、その頃流行した双生児の仲違ひの問題である。フェルディナンドとグエルフォーは双生の兄弟であつたが、どちらが先に生れたともわからぬのにグエルフォーが弟とされ、彼はそのため後繼ぎとしてのあらゆる榮譽を奪はれ、そればかりでなく、戀人のカミラをも兄に奪ひ取られてしまふ。それをうらみに思つたグエルフォーは、遂に兄の結婚式の前日、彼を殺し、自らも父の手によつて死んで行くのである。

この作品がライゼヴィツのそれよりもすぐれてゐるとされたのは、もちろん、全篇をつらぬくはげしい情熱性、特にこの情熱を集約的に表現するグエルフォーの性格にもとづくのであらう。しかし、この作品もまた、讀者の心を十分に納得させる必然性の肉づけが十分でないために、心ある人のひんしゆくを買ふことを免れなかつた。たとへば、アウグスト・ビュルガーのやうな、疾風怒濤の詩人たちに比較的親近であると考へられる人でさへ次のやうに書いてゐる。「親しき人たちよ、諸君は、この大げさな言葉にたぶらかされて、この作品をすばらしいなどと思ふことがどうしてできるだらう。——この中では、誰一人として自然な性格をもつてゐる者はない。グエルフォーは畜生である。こんなものは狂犬なみに射殺されるのがよろし。」(H. Hettner, *ibid.* S. 210)と、つろで、グエルフォーの如き性格に對しては、クリンガー自身もこれを肯定的に見てゐるのではない。惡しき情熱にかられるグエルフォーは、いはば不幸なる Genie の呪はれた運命を表示する。彼が破滅して行くのは作者にとつても當然のこととされるのである。これに反して、兄フェ

ルディナンドは、特に強調こそされてゐないが、好ましい人物として作者によつて温かく描き出されてゐる。かく見れば、この作品の主題は狂暴な情熱の生み出す葛藤でありながら、作者の心は既に激情そのものをはなれ、その一そう醇化された境地に向はうとしてゐることは明らかであらう。感情も力も、この作品においては、新しい時代の理念にふさはしい尖鋭な形で積極的に形象化されてゐないといつてよいのである。

ハ、「ジムゾーネ・グリザルド」

私は以上において、クリンガーの初期の三つの作品をとりあげ、これに検討を加へてきたが、それらの作品は、疾風怒濤の作家としてのクリンガーの *Kraftgenie* たる所以を何ら積極的に示さず、その人生觀において又藝術觀において、時として著しく啓蒙思潮の殘滓をとどめてゐることに氣づかざるを得なかつた。もしクリンガーが、人間として又作家として、ゲーテをはじめ多くの人々に感銘を與へたやうに、眞に力の天才であつたとするならば、これを一そう積極的に示す作品はないであらうか。私はここに、彼が一七七六年に發表した「ジムゾーネ・グリザルド」(“Sinsone Grisoide”)をとりあげてみたいと思ふ。この作品は、これまで一般にはほとんど問題とされたことがないやうであるが、私は、ゲーテ、シラーを除く當代の詩人たちの作品の中で最もすぐれた、少くとも最も問題をはらむ作品の一つであり、クリンガー自身にとつても代表作といはれてよいものと考へるので、以下しばらくこれについて述べてみよう。

カステイリアの將軍ジムゾーネ・グリザルドは、戦場にサラセン王を捕虜とした。彼は、カステイリアに並ぶ者なき勇將であるが、國王に對する忠誠においてもゆるぎなき誠實な人間である。己れの武功に對してこれまで何らむくいられるところがなかつたにもかかわらず、彼はひたすら眞心をこめて國王に仕へてゐる。が一方、英雄グリザルドは無

邪氣な少年のやうに色を好んだ。すべての女性もまた、剛健にして虚飾なき彼の魅力にはいかんとも抗ふことができない。「女たちはみな、あの方の心を少しでもひいたことを誇りに思つてゐるではないか」(Ⅰ・1)と作中のある男が言つてゐる通りである。かうして、サラセン王の娘アルメリーネは忽ち彼の愛人となる。ここに、セバスチアーノとクリオといふ二人の貴族は、グリザルドーの盛名をねたみ、折あらば彼をのけ者にしようとしてゐる。國王もまた、グリザルドーの忠誠を信じつつも、自分が今や彼の力なしには何事もなし得ないことを思ひ、ひそかにグリザルドーの聲望に不安を感じてゐる。かくして、セバスチアーノとクリオは、國王の不安を利用してグリザルドーを失脚させ、あはよくば王國を自らの手中におさめようと考へる。たまたま、かつてグリザルドーによつて征討されたアラゴンの女イサベラは、グリザルドーの寵を得てゐたが、今は打捨てられて悲しい境遇にあつた。セバスチアーノはこの女を利用して、グリザルドーに近よらせ、彼を盲ひにしようとする。しかしこの時、新しい愛人アルメリーネが危く彼の危機を救ひ、グリザルドーは悪人共をこらしめ、國王の地位を安泰にした後、自らはアルメリーネと共に幸福な生活に入る。主人公の名前からもうかがはれるやうに、この作品の背景に舊約のサムソンをめぐる物語があることは明らかであらう。

全篇を通じて最も感銘を與へるのは、グリザルドーの剛健にして誠實な武將的性格である。不遇を意に介せず、國王に對してかはらぬ忠誠をささげる彼の朴直な風格は、讀者の共感をよびさますにはほない。多くの女性を次々に愛しながら、その愛情の素朴純粹の故に、あらゆる女性に慕はれる所以を讀者もまた納得する。彼はイサベラが言つてゐるやうに、「數知れぬ不實を犯しながら、愛せずにはゐられないやうな」(Tausend Untreue begangen, und doch so lieb) (Ⅲ・4) 男なのである。

作品全體の構成も概ね均衡を保ち、性格の對照も成功してゐるといふてよい。グリザルドーと敵役セバスチアーノは、共に實行力のある男であるが、一は健全であり、一は病的な虛無主義者である。この對照は、セバスチアーノが父フェルナンドと、グリザルドーが友人マルヴィチーノと語る場面に際立つて現れてゐる。セバスチアーノは生來非常な野心家であつた。が彼の願ひは何一つ實現されない。彼の目の前には、グリザルドーのゆるぎなき威望が立ちはだかつてゐる。のみならず、グリザルドーが次々と女性の心をかちえて行くのは我慢がならない。彼は失意と焦燥のあげく、人をも世をも呪ふやうになる。「おお、いとふべきこの世の中、俺はこの世界がすべられてゐる結び目をひとつとらへ、この世界をばらばらにときほごしてしまひたいのだ。俺は何よりこの世の終りが見たいのだ。夢や憧れを胸にいだき、願望にかられてあがいてみたところで一體何になるといふのだ。」父フェルナンドは、絶望に狂ふセバスチアーノを慰めようとする。が彼はもはや一切人間にかはらうとしない。「私はこれまで自分の望みを何一つ果したことがない。私があなたに何の關係があるといふのです。あなたは私にとつて何物でもない。私自身が私にとつて無なのです。私はこの世のどんなものにも縁がない、あつてもらひたくないのです。」(Ⅱ・1) かくの如き自暴自棄の虛無主義が、あらぬ野望の實現のために一轉して惡業にふみこむのは必然の推移といふべきである。

一方ジムゾーネもまた、はじめから運命の寵兒だつたわけではない。出發點では彼もセバスチアーノと同じく人間にあきらめをつけてゐる。彼は誠心誠意を以て國王に盡しながら、國王からは何らむくいられるところがなかつた。人の苦しみを見ては黙つてゐることのできない彼の義侠心は、乞はれるままにどんな危険にも飛びこんで行くことを辭さなかつた。が人々は感謝の心を知らず、要求することのみ多くして限度といふものがない。「人間どもは大抵ろくな奴はゐない。わしは奴らに

かかり合ひになりたくないのだ。奴らはあくこのない慾望をいだいて、恥知らずな要求ばかりしてゐるのだ。」(Ⅱ・2)がここでジムゾーネは考へる。このあさましい世界を前にして、さて自分に何ができるといふのか。世の中をひつくりかへすことも、人間の心を改善することもできるものではない。自分にそれができないとすれば、自分もまた他人と同じやうに生きるほかはない。もし自分に他人よりもすぐれた點があるとすれば、自分はそれを人々のためにやるやうに使つて行かう。國王が自分を冷遇してゐることも、今はもう自分の心を暗くするものではない。人のため、國のため、分相應の力を盡すならば、國王もまたいづれは自分の眞意をわかってくれるであらう、——己れの分を知つて他に多きを求めないグリザルドーのかくの如き態度は、彼の戀愛生活においても變らない。第二幕第二場で、セバステアーンがジムゾーネと話す場面がある。セバステアーンは言ふ。「——ああ女たち。彼らは男の心臓も腦もかみくだいておいて、おまけにそれを嘲笑つてゐるのです。」ジムゾーネは靜かにそれに答へて言ふ。「女たちにできること以上のものを望まぬならば、女たちは我らの心を限りなくみたくしてくれるのです。」かうして、野心と嫉妬に心をかまれるセバステアーン、あるひは文弱なクリオとの對照において、剛健にしてしかも勇武におごることのないグリザルドーは、節度ある好もしき男性として讀者の心をとらへる。

ところで、ここに我々が注意すべきは、この「ジムゾーネ・グリザルドー」においても、實は疾風怒濤的な問題が主題的にはとりあげられてゐないことである。主人公ジムゾーネは、既に一個の圓熟した人格として、人生の矛盾を達觀し、これをはるかに超出していはば一種の古典人的風格を打出してゐる。もとより、ジムゾーネの自由なる戀愛生活は當代の青年たちの理想とするところではあつた。いたるところに女性の愛をかちうるジムゾーネは、それ故疾風怒濤人の理想とも見られるであらう。

う。がしかし、ジムゾーネに具現される戀愛において、我々は新しき理想をかかげようとする革新的なもしくは反抗的な情熱の奔騰を見ることはできない。逆にジムゾーネは、戀愛において節度を心得、戀の惱みによつて「心臓も腦もかみくだかれ」たりしないための手心を十分に會得してゐる。これは、たとへば、夢に戀人に出會ひ、さめては空しく彼女を求め、涙の瀧は息苦しい心の堤を切つて流れ、慰めもなく暗き世界に面して泣いた若きヴェルテルの純愛(八月二十一日)と相距ることいふばかりであらう。一般に戀愛の情熱が缺如態において一そう純粹にもえ上るものとすれば、そのやうな危険をたくみに回避することのできるジムゾーネは、既に戀愛の主人公たる資格をかいてゐるといはなくてはならない。かくの如き人物を主人公とするこの作品において、戀愛が中心のテーマとなり得ないのは當然のことであらう。極言すれば、グリザルドーは情痴をたしなむのである。戀愛に關する限り、永遠の美を求めてさすらうたドン・ジュアンほどの精神性も彼にはないといはなくてはなるまい。

しかるに、この苦惱なき戀人ジムゾーネが、一たび戀情の嵐に押し流されようとする場面が展開する。彼は、新しき情人アルメリーネと共に、ある山城で戀の歡びにふけてゐた。彼女のやきつくすやうな愛は、今やグリザルドーの心を完全にとらへてしまはうとする。が彼の武將としての強い使命感は、戀の幸福が高まるにつれて、一そうはげしく彼の心によみがへつてくる。「わしはここでそなたを前にして身動きもできなくなつてゐる。——アルメリーネよ、だがわしは行かなくてはならぬ。わしは何もかも捨てなくてはならぬ。この世の中でわしの愛するすべてのものをだ。わし自らをも捨てなくてはならないのだ。——ああ、わしはここでかうして我が身を終へなくてはならないのか。そなたの胸にいだかれて生を終へるのか。アルメリーネよ、そなたはわしを破滅に追ひやる女ではなかつた。心を取りなほしてくれ。——さあ元氣を出し

てわしを助け起してくれ。——」アルメリーネは、「あなたはかれることのない永遠の愛の息吹を私にかけて下さいました」と言ひながら、グリザルドーの髪を自分の髪に結びつけ、「あなたは私のものです。さあ、ときはなしてごらん下さいまし。力強い方よ、愛の絆を引きちぎつてごらん下さいまし。——」万人にまさる力を與へられたグリザルドーではあつたが、今や彼は愛の力の前に打倒されようとする。がこの時、アルメリーネはむせび泣きながら刀をとつて彼にわたす。女は英雄の心をふるひたせばしても、ひるますべきではない。グリザルドーが自分を心から愛してゐることを信じうるならば、たとへ彼が遠くはなれてゐても、自分はそれにたへなくてはならない。「お行きなさいまし、グリザルドー様。あなたがおいきになつても、愛は私から去つては行きません。」(I・3)

ここには、情熱の一方的な主張はない。同時に、義務感が冷酷に情熱を否定してゐるのでもない。義務と情熱とが、その相剋の頂點において一そう高い和解點に達してゐるのである。古典主義の最も主要な精神が感情と理性とのより高き綜合にあるとするならば、疾風怒濤人クリンガーは、既にこの作品において古典主義の段階に達してゐる。少くとも古典主義の根本問題をとりあげてゐるといつてよいであらう。もとより、この作品は、成立の時期よりすれば前述の「疾風怒濤」に先立つものである。クリンガーがなほ疾風怒濤の雰囲気を出してゐなかつたことを示してはゐる。しかし、「疾風怒濤」においても、作者の心が既に情熱の醇化への強い傾向をはつきり示してゐることは我々が先に見たところである。彼の希求する理想の境地は、時として擾亂されることはあつても、依然として彼の本質性を現すことにはかりはない。一體、クリンガーの初期の創作活動は、一七七五——七年の三年ほどの間に集中されてをり、而も七十年代の終りには早くも疾風怒濤の風潮を脱却してゐる。従つて、その作品系列を年代順にたどつて彼の作家としての成長のあと

をうかがふことはさう重要なことではなく、又必ずしも正當とは言ひがたい。のみならず、この時期の作品に彼が本質をかけたと言へるものはほとんどないと言つてよいであらう。處女作「オートー」がシェイクスピアやゲーテの拙劣な模倣にすぎず、「惱める女」はレンツからの悪い影響を示す以外のものではない。最も評判になつた「双生児」にしても時流に押し出された應募作品といふ制約から自由ではない。いはんや、空しく有名になつた「疾風怒濤」の如きものを表面的にうけとつて、これを直ちにクリンガーに結びつけることは、この詩人の本質を失ふることにもなりかねないであらう。このやうに見てくれば、我々は、クリンガーの本領が「ジムゾーネ・グリザルドー」に最もよく現れてゐると考へざるを得ない。ゲーテが自傳の中で、クリンガーを稱して、彼は情に流されず常に中庸を得てゐたと言つてゐるやうに、本來彼の中には、激情にかられた病的な叛逆精神などといふものはなかつた。「エミール」が彼の聖書であつたことは既に述べたが、ルソーによつて導かれた自然によせる讃仰は、彼において、人間社會へのいたづらな反抗として現れる必要はなかつた。當代の多くの若者にとつて、ルソーは、己れを過大視し時には甘やかせる恰好のよりどころとなつたが、クリンガーにとつて、ルソーはあくまでも自主獨立の毅然たる精神を培ふべき師だつたのである。更に、グリザルドーの戀愛生活もまた單に物語として、あるひは理想として描かれてゐるのではない。エーリヒ・シュミットのつたへるところによれば、彼を熱愛したアルベルティーネ・フォン・グリーネンといふ女性に、彼について“Er, der gewohnt ist, dass Mädchenherzen sich vor ihm biegen”と言つたことゝ。(E. Schmidt: Lenz und Klinger, S. 66) 彼は多くの戀に恵まれた男性であつたらしい。かくして、ジムゾーネ・グリザルドーは、その志操において又その感情において、クリンガーの理想である以上に彼の現實であつた。

ところで、クリンガーの本質を右の如く規定するならば、ここに又一

つの問題が押し出されてくる。即ち、疾風怒濤の代表的詩人とされてゐるクリンガーが、既にこの時期において、疾風怒濤の作家といふよりはむしろ古典主義の作家により近いといふことである。もとより、彼の「ジムゾーネ・グリザルド」が、たとへばゲーテの「タソー」や「イフィゲーニエ」にそのスタイルにおいてひとしいと言ふのではない。「タソー」などの流麗なスタイルや簡潔な構成を知るものは、「ジムゾーネ」のざらざらした肌ざばりに不快感をさへ禁じえないであらう。これについては、E・シュミットが「ジムゾーネ」をもつてクリンガーの「最も不自然な」作品と稱し、(E. Schmidt, *ibid.* S. 96) もし「ジムゾーネ」の如き作品が上演番組になつてゐたら、折角ゴットシェトやレッシングによつて泥沼の中から引きあげられた演劇術も、再びすぎ去つた時代の粗惡な自然主義におちこんで、それまでよりも一そう長い間ヴァイマル流の古典的理想のスタイルを待ちのぞまなくてはならなかつたらう、——そもそもクリンガーが劇詩人だつたのだから恐れ入つた次第である、(E. Schmidt, *ibid.* S. 96) と述べてゐるほどである。が、私はここにスタイルの問題を論じてゐるのではない。藝術的圓熟の點で、クリンガーがゲーテやシラーと同日に論すべきでないのは申すまでもない。しかし、少くとも人間的資質において、彼はより多く古典人への傾きを持つてゐたと言ひうるであらう。さうしてこの意味で、クリンガーはレンツその他の疾風怒濤人とはつきり異つてゐたといはなくてはならない。もつとも、ブランドスによると、クリンガーもまたレンツその他と同じやうに疾風怒濤の氣狂ひ共 (Tollköpfe) の一人として、ヴァイマルのゲーテの惱みの種となつた横着な人間のやうに書かれてゐるが、(G. Brandes, Goethe, S. 182) しかしクリンガーはそれほどあつたかまじい人間でもなく、又それほどひどい振舞をしたわけでもない。他人の好意に甘えすぎる虫のよい人間であるためには、彼ははるかに誇りも高く毅然としたところのある人間であつた。一體、クリンガーがゲーテの

もとをやつて行つたのは、彼がわづか二十五才の時のことであり、ゲーテとても二十八才の若者であつた。かつて共に語つた文學の盟友が今ヴァイマルの宮廷に愉快な生活を送つてゐるときいて、彼をやつて行く氣になつたとしても何ら異とするにあたらない。又血氣さかな青年が、いやにとりすましたヴァイマルの宮廷人の氣色を損ずる振舞が多少はあつたとしても、眉をひそめた當の人々にも半ばの責任はあらうし、いはんやこの一事を以てクリンガーの全人格を斷じ去ることの不當なるは言ふまでもあるまい。しかもクリンガーは、自分の存在がゲーテにとつて迷惑になることを感ずるや否や、すぐさまヴァイマルを去る決心をした。のみならず、彼はゲーテの自分に對する拒否的な態度をいさかもふくむことなく、遠くロシアに去つて後も、ゲーテとの友情をあたためることを忘れなかつた。我々はクリンガーのヴァイマルにおけるエピソードから、精一杯立派な男らしい彼の性格をこそ讀みとるべきであらう。慧眼にしてまことに小氣味のよいブランドスの筆も、この點についてはゲーテに共鳴するに急でいさか當を失したきらひなしとしない。かくてクリンガーは、丁度ゲーテがヴァイマルに行つて實際人としても完成したやうに、右の作品を矢つぎ早に發表し、七六年、ヴァイマルのゲーテのもとを去つてから、しばらく流浪の後オーストリーの將校としてバイエルンの繼承戦役に加はり、八十年にはロシアの將校としてベテルスブルグに向ひ、以後その地にあつて實際の生活に入つた。この頃彼は一友にあてて、「僕は自分の天職を見つけた」 ("Dass ich meine Bestimmung gefunden habe, wirst du glauben." 1779. K. Freye, *ibid.* S. LXV) と言ひ、更に同じ友にあてて、「廣い世間から事實を學びたまへ、世の中にとびこんでみたまへ、四壁にとりかこまれた我々のいとなみがすべていかにあやまつてゐるか、くだらぬものであるか、全くの妄想にすぎぬか、に君は氣がつくだらう。」 (1780, *ibid.* S. LXV) と書いてゐる。ベテルスブルグで將校になると同時に、彼は貴族に列せ

られた。ゲーテがフォン・ゲーテとなつたやうに、彼もまた今やマクシミリアーン・フォン・クリンガーである。ここに彼の生涯の新しい時期がはじまる。彼はロシアに行つてからもいくつかの作品を発表してゐるが、疾風怒濤の詩人としてのクリンガーのみが問題とされる文學史の常識によつて、それ以後の彼の活動は問題とされることがない。が、もし作家論が人間論に歸着するとすれば、クリンガーの後期の作品こそ一そう問題とさるべきであらう。我々は、彼が疾風怒濤を克服して新しい未來を眼前にしながら、はるかに過去をふりかへつてみた作品、その意味で彼の前半生の決算とも集大成とも見なさるべき「ファウストの生涯と行爲と地獄墮ち」(Faust's Leben, Thaten und Höllenfahrt 1731)をとりあげてみなくてはならない。

二、「ファウスト」

クリンガーのファウスト・ロマーンは、彼がベテルスブルグに行つて發表した最初の作品である。ドイツ文學において、ファウストといふ人物が既にレッシングを先蹤として(一七五—九九年と推定される)ゲーテ(初稿「ファウスト」は一七七三年、フラグメントとしては一七九〇年)やミューラー(一七七八年)によつてとりあげられてゐることは周知のことであるが、傳説的な生涯と行動につつまれたこの人物は、當代の青年たちが己れの願望と情熱をふきこむべき最大最適のタイプであつた。クリンガーもまた、今生涯の新しい出發に際し、この人物に己れの全體験全思索を叩きこんでみようと考えたのであらう。ところで、この小説はファウスト文學の系列においていかなる意味をもつであらうか。まづこの「ファウスト」には、我々がすぐ豫想するやうな、人間の魂にひそむ奥深い秘密、善惡の葛藤、世界人生の多彩な姿の反映はほとんど見られない。ファウスト文學として見るならば、クリンガーのファウストは、A・ザウエルが言ふやうに、ミューラーのそれと共に「よりすぐれたファ

ウストを生み出すべき足場であるにすぎなかつた」(A. Sauer: Stürmer und Dränger, I. Teil, S. 41)とつてよいのである。又「W・クライツェナーは、クリンガーのこの作品をもつて『ウィルヘルム・マイスター』の對をなすものである。なぜなら、我々はこの、疾風怒濤時代のゲーテの若き友が彼なりのやり方で、成年者の經驗の諸成果を詩的に形成してゐるのを見るからである」(W. Creizenach, Goethes Jubiläumsausgabe, 17. B. S. XIX)と言つてゐるが、クリンガーの「ファウスト」は、その藝術的構成からいつても、主人公の性格からいつても、決して「マイスター」の對をなしうるものではない。第一に、このファウストの魂には發展進化といふものがない。彼の魂は、終始一貫疾風怒濤の反抗と憤怒にかられた人間として、作者によつてイローニッシュに眺められてゐるにすぎない。メフィスト役に相當する惡魔レヴィアタンもまた、ファウストの魂にからみ合ふ Doppelgänger としての意味を全くもつてゐない。彼は、作中でしばしば呼ばれるやうに、ファウストに神通力を與へる Tausendkünstler であるにすぎない。總じて、人間の内心にひそむ善惡の複雑な問題はファウストにとつても惡魔にとつてもなら問題となつてゐない。自己の魂の生成發展を知らず、ただ惡魔の導きで下界をめぐるファウストは、かくして、單に作者クリンガーの目に映じた社會批評を、様々のシチュエーションにおいて展開すべき狂言またはの役割しか與へられてゐない。しかもファウストが見出す世の姿は、たとへば「マイスター」などに見られる多彩にして豐饒な人生の諸相ではなくして、いはば黒一色にぬりつぶされた地獄圖繪にすぎないのである。ファウストが遍歴する國々は、ドイツ、フランス、イギリス、イタリアと、ほとんどヨーロッパ全體にわたつてをり、登場する人物も、上は君侯や法王から下は乞食の如きにいたるまで多様を極めてゐるが、作者がファウストに托した視點が、人間界の惡をあばくといふ一點に限られてゐるため、作品全體の與へる印象は甚だ單調であり、作者の人生觀

照もまた極めて一面的であるといはざるを得ない。かうして、ファウストが長い旅の後に得たものは人間界に對する深刻な絶望感である。「人間の冷酷、欺瞞、暴虐、惡いことなら何でもする態度、金のため、出世のため、又情慾のためにする犯罪、」(Ⅲ・2)これが人間のやることのすべてであり、「人間憎惡、人間蔑視、疑惑、あらゆるものに對する冷淡、自己の肉體的精神的力のいたらなさに對する不滿の情、これが彼の經驗の成果であり、彼の生涯の收穫であつた。」(Ⅴ・1)とここでここに注意しなくてはならないのは、作者クリンガーの心は、このファウストと共にがき、苦しみ、絶叫してゐるのではない。苦悶するファウストは、既にかかる苦悶を達觀したクリンガーによつてイロニシシュに眺められてゐるのである。それが最もよく現れてゐるのは、Ⅲ・2におけるドクトル・ローベルトゥスの話であらう。この男は、自分の主君に對する諫言がいられず、牢獄につながれる身となつた。ファウストは彼の前に現れ、その身の上話をきく。ローベルトゥスは、暴君の恣意がほしいまに人民を苦しめる現狀に對して悲憤慷慨する。「己れ的情慾を満足させ、驕慢なふるまひをするためにのみ己れの權力をふるふ者が、いかなる法にも屈せず、その責任を問ふべきいかなる裁きをも知らぬとは馬鹿げたことではないか。」ファウストはこの言葉に感動し、更に宮廷に赴いて事の真相を正さうとする。がそこで彼がきいたのは、あの男は主觀的には正義人道を口にするが、實は思慮分別をかいだ氣狂ひじみた男にすぎないといふことであつた。作者は、この時のファウストについて次のやうに註釋を加へてゐる。「もしファウストが、我々の若い Freiheitsschreier を知つてゐたなら、彼はドクトル・ローベルトゥスの言葉に迷はれることはなかつたであらう。」

ここにクリンガーが Freiheitsschreier と言つたものは、もとよりかつての自分自身の姿であり、又自分と共に文學運動に参加した疾風怒濤の詩人たちに他ならない。「自由」は、その生涯を通じてクリンガーを

導いた最高の理念ではあつたが、かつての、理性なき自由への衝動は、既にクリンガーによつて克服されたものであつた。かくして、この小説に著しい今一つの特色は、かつての疾風怒濤人に對する皮肉や嘲笑的な態度である。これをよく示す例としては、Ⅲ・9 以下に語られる、觀相術を行ふある若い修道士の話があげられるであらう。この修道士には明らかに J・K・ラーヴァターとクリストフ・カウフマンが諷せられてゐる。前者は言ふまでもなく若きゲーテの先輩として、その觀相學によつて若き詩人たちの心をひきつけてゐた。後者は、自らラーヴァターの使徒と稱して、奔放不羈な天才ぶりを誇示してゐた男であり、クリンガーの作品 "Wirwar" を "Sturm und Drang" と改めることをすすめた當の男であつた。作者は、この修道士に對して次のやうに言つてゐる。「彼は、自分の僧房の四つの壁と、自分と同じやうな人間をしか見たことがない上に、人間や世界や眞の學問については、熱狂的な想像力をもつた人々に普通見られるやうに、甚だ無知であつたし、かういふ人々は、おまけにどんな疑ひにぶつかつても、すべてこれを信仰といふ破壊的なハンマーで打ちくだいてしまふ、だから、この男の仕事も全く空想によつて導かれてゐるといふことは見易い道理である。」従つて又作者は、ファウストに次のやうに叫ばせてゐる。「影だ、さうとも、貴様が見たのは影にすぎぬ。貴様はあつかましくも、熱にうかされて狂つた想像をひきつらせて、人類を裁くだのはかるだのとぬかしてをるが、貴様は一體何者なのだ。貴様は人間を見たことがあるのか。どこで、どうして、いつ見たといふのだ。貴様が見たといふ人間は影にすぎぬ。それを貴様の空想の空しい綾で飾りたて、そいつを本物だなどとほざいてゐるのだ。——貴様が見た作家どもは、貴様が奴らの凡くらな面に Genie のスタンプをおしてやれば、いい氣になつてゐる輩にすぎぬではないか。」

かく見れば、クリンガーが小説「ファウスト」で取つてゐる立場は自

ら明らかである。彼は、世界人生を、悉く詐欺、欺瞞、暴虐、陋劣、その他あらゆる惡徳のうごめく地獄と見た。この地獄に對しては、作者もまたファウストと共に憎惡と侮蔑の態度を取らざるを得ない。しかし彼は、かつて疾風怒濤の人々がこの惡逆の世界に感情的に激突して敗北し去つたのとは異つて、あくまでも確乎とした自己を貫き通すことができた。クリンガーはこの小説の終りに近く次のやうに言つてゐる。「經驗によつて惡くなるのは、臆病な劣等な心の者だけである。高貴な魂を有する者は、人間の惡徳や迷ひを、己れの胸のハルモニイによつてより明るき光の中におかるべき、又それによつて自らの幸福を一そう強く感じうるやうになるべき、單なる不協和音として受取るのである。」(V・1)かくの如き感慨は、ロシアにあつて自分の天職を見出したといふクリンガーの心境を、更に又彼の自信のほどを何よりもはつきりと表示してゐる。しかもこのやうな境地は、既に見たやうに、彼の初期の活動においてはつきりとうかがはれるものであつた。して見ると、彼のいはゆる疾風怒濤期の仕事は、ファウスト・ロマンにはじまる第二期のより本質的な時代のための單なる豫備段階にすぎないといつてよいであらう。それのみではない、彼の初期の詩業が七十年代のわづか三年ほどの間に集中されてゐるのであるから、彼の當代文學に與へた影響は別として、彼個人の作家的本質を問題にするならば、クリンガーを單に疾風怒濤の詩人として片づけてしまふのは甚だしい片手落ちにすぎないであらう。

フリードリヒ・グンドルフはかつて、次のやうに言つた。「ゲーテが他の疾風怒濤人よりぬきん出てゐるのは、その天才が彼らより比較にならぬほど充實し、その性格が強大であつたことにのみよるのではない。ゲーテは、その激動の方向によつてすでにぬきん出てゐたのである。——他の疾風怒濤人にとつては疾風怒濤は目的であつた。がゲーテにとつて、それは出發點にすぎなかつた。」(F. Gundolf: Goethe, S. 107)もとより、グンドルフ一流の巧妙な對比によつてゲーテの本質を喝破し

た言といつてよいであらう。が我々は、クリンガーの生活と詩作を通じて、いかに彼が混沌から淨化への道を努力しやがてその本來の目標にたどりついたかを見てきた。彼の人間としての大きさ、又世界觀照の深さ、豊かさはむろんゲーテのそれに比すべきではあるまい。しかし我々は、グンドルフのこの言葉を少しく擴張して次のやうに言ふことができるであらう。「クリンガーにとつて、疾風怒濤は、ゲーテにとつてより以上に單なる出發點にすぎなかつた」と。

三、むすび、——將來の問題

以上述べたところによつて、私は、クリンガーの生活と作品を通じて、彼が通常、疾風怒濤の代表的詩人とされるにかかはらず、その本質が實はそれを超え出たところにあり、彼の最も疾風怒濤的と稱される作品においても、むしろそれを否定し、それを克服しようとする意欲が明らかに見られることを指摘しようとした。が私は、名の有名な實は忘れ去られたにひとしいこの詩人を、もう一度文學史に浮び上らせること自體を本來の目的としてゐるのではない。

ゲーテやシラーと並んで、この運動の最も代表的な詩人とされるクリンガーにおいてさへも、疾風怒濤は單に目標に向つての助走の意味しかもつてゐない。彼以外の、たとへばレンツ、ヴァーグナー、畫家ミューラー等々にいたつては一そうそのことを指摘しうるのであらう。つづめて言へば、疾風怒濤期において眞に疾風怒濤的であつたのはゲーテ、シラー以外にはないと言つてよいであらう。この兩者を除けば、いづれもこの新しい時代の理念を支へるに足るやうな力も才能ももつてはゐなかつたといはなければならぬ。にもかかはらず、これらの詩人群が、この運動の華々しい擔ひ手として考へられ、この運動が廣汎な一つの時代的風潮のあらはれとされるのはいかなる理由によるのであらうか。それはほかでもない。ゲーテと、ややおくれてシラーの經過した青春時代が、丁度

この時期にあたり、しかも彼らの疾風怒濤が、單なる個人的體驗であるにとどまらず、後の古典主義的完成にいたるまであまりにも強大な線を畫き、彼ら自身の發展が他ならぬこの時代の發展とさへ考へられるやうになつた。この狀況は、逆に彼らの疾風怒濤的體驗をも實際以上に擴大し、時代全般の、少くとも主要な風潮の一つと考へさせることになつたのであるまいか。してみれば、先にフリードリヒとの關聯においてレッシング傳説が形成されたやうに、ルカーチとは別の意味でゲーテやシラーを顯揚するために「疾風怒濤傳説」が作り出されたといへるであらう。

H・A・コルフが、大著「ゲーテ時代の精神」において、第一卷を「疾風怒濤」にあててゐるのは周知のことであるが、實はこの第一卷は、ゲーテとシラーの疾風怒濤にほかならず、他のすべての作家たちは、いつの時代にも存在する凡庸な青年たちの、青年ならば誰しもが經驗する薄弱な沸騰と混亂を示してゐないといつてよい。極言すれば、疾風怒濤も古典主義も、時代の風潮としてはゲーテやシラーの影にすぎぬといつてよいであらう。偉大な個人が時代をつくるといふ、その著しい例を我々はここにも見出しうると思ふ。従つて、コルフのいふゲーテ時代の精神は正しくゲーテの時代精神なのであり、更にゲーテ精神の時代と考へられるであらう。がそのためには、更に稿を改めて論じなくてはならぬ。

(一九五、一、三一)

註

(一) このやうな批判の最も尖鋭な現れは Franz Mehring: Die Lessing'sche Legende, 1893 であらう。次にのべるルカーチのゲーテ時代批判が、この書に展開された立場を更におし進めたものであることは彼の言葉からも明らかである。(G. Lukács: Goethe und seine Zeit, S. 11) 又 Werner Maibohd: Literaturgeschichte und Literaturwissenschaft, 1923 においても、この時代の評價が特にゲーテ自身の叙述の無批判な受容によつてゆがめられてゐることが指摘されてゐる。(S. 10 f.)

(二) これについては W. H. Bruford がレッシング自身の言葉を引用して、作者がこの作で企てたのは “eine von allen Staatsinteressen betriehte Virginia” を描くことであつた(これに反し、疾風怒濤の青年たちははるかに Klassenbewusstsein であり、revolutionärer であつた)と言つてゐる。(Die gesellschaftlichen Grundlagen der Goethezeit, S. 322)

(三) 「ドイツの青年は、レッシングの先行してゐるところでは、他の道に見られぬほど確信をもつてゐた。なぜなら、この人物がおくれをとつたり、あらぬ方へ人を導いたりしないといふことを人々は知つてゐたからである。ドイツ人にとつて、レッシングは、シェイクスピアといふこの新大陸のコロンブスなのである。」(ibid. S. 157)

(四) これを最もはげしく、實はドン・キホーテ的な勇ましきでやつたのは Reinhold Lenz: Anmerkungen übers Theater, 1774 である。彼によれば、アリストーテラスの法則は “die so erschrockliche, jümmlichberühmte Bulle von den drei Einheiten” (E. Loewenthal: Sturm und Drang, kritische Schriften, S. 729) である。

(五) 藝術現象を専ら社會的環境から説明しようとする試みは屢々行はれてゐる。しかし、たとへば H・テューは「藝術哲學」(一八六五年)で精神的氣候の説をたてたが、彼の見た氣候や風土は、實は藝術作品の先驗的の了解を先立たせ更にそれを環境に流しこんだ上での考へであらう。従つてテューの説で最もすぐれてゐると思はれるところは、實は彼の藝術鑑賞眼が卓越してゐることを示すのみで、その理論の正しさを示すのではない。又、F・メーリングは「レッシング傳説」において「たしかにある精神的作品は、その作者が生きた政治的社會的狀態からのみ究極的に理解せらる」とし、その正しい方法はマルクス、エンゲルスによる唯物史觀である。(S. 31)と言つてゐるが、文藝の文藝學的理解が一面的であるとするならば、彼の立場はより多角的ではあらうが、その社會的政治的解明のみで事たりとするならば、彼もまた一面的であるといはねばならぬ。又 W・M・フリーチエが「藝術社會學」(一九二六年)で企ててゐるところも、全般的な藝術傾向を社會經濟と關聯させる點である程度成功してゐるやうに思はれるが、全般的の傾向の中で又はそれに反抗して行はれる藝術家の個性的な活動については解答を與へ得てゐないと思はれる。要するに、外界の條件をどのやうに精細に説明しても、それらは對象の周邊をうろつくばかりで、藝術家の個性の秘密はあくまでそれを超え出たところに求められざるを得ない。藝術の社會學的研究のほかに、その藝術的研究が行はれなくてはならぬ所以である。

(六) 「レッシングの詩句が論理によつて、いかな分析によつて構成され支へられてをり、シェイクスピアのそれは一內的構成において既に別の條件を示す」(ibid.

S. 147)とグンデルフは言ひ、「ナータン」と「ハムレット」を比較しつつ兩者の本質的な差異を立證してゐる。この心的形式の相違がレッシングと疾風怒濤の間にも認められるのである。

(七) Eduard von der Hellen の註釋によれば、この詩はクリンガーのほか二人の人にも送られてゐる。従つて必ずしもクリンガーだけに對するゲーテの個人的な感慨が示されてゐるのではなく。(Goethes Jubiläumsausgabe. 3. Bd. S. 345)

(八) この作品がレンツの遺稿から出版されたのは一七九七年である。この頃シラーはゲーテにあつて、「tolles Zeug」とあり「biographischen und pathologischen Wert」をもつと書してゐる。(一七九七年、二月二日)

(九) これが現れた時「シネバルトは誤つて「我らのシネイクスニア、不滅なるドクトル・ゲーテ」の作と叫んだ。(K. Frey: Sturm und Drang, I. S. XXXIII) これは「シネバルトの批評眼の拙さよりも、このやうな作品でさへも感動して迎へられねばならなかつた當時のドイツ文學の貧しさをよく現すものである。

(十) レンツがゲーテの兄弟を以て任じてゐた自負、實は焦燥の感じは、その作詩「Pandämonium Germanicum」1775に著しう。その中で、レンツは「Bruder Goethe」と言ひ、「Ist mir's doch, als ob ich mit dir geboren und erzogen wäre。」(I. 1)と言つてゐる。

(十一) Werner Kurz: F. M. Klingers Sturm und Drang 1913, これは Halle の Franz Saran 教授の監修した Bausteine zur Geschichte der neueren deutschen Literatur の第十一卷に相當する。

× × ×
本論文で私が用ひたクリンガー、レンツその他のテクストは Karl Frey の編集したボンゲン版 Sturm und Drang, Dichtungen aus der Geniezeit, 2 Bde. により、それに收められてゐる「Fausts Leben, Thaten und Höllefahrt」は Kürschner の Deutsche National-Literatur の 44 August Sauer による Sturm und Dringer, I. Teil, 1883 に引いた。又「Otto」は Bernhard Seuffert の監修による Deutsche Litteratürdenkmale のうちゾイフェルト自身が編んだ第一卷「Otto」に従つた。